



# きつね・病・死のしらせ : 兵庫県三田市における怪異譚を中心として

久下, 正史

---

(Citation)

鶴山論叢, 03:45-58

(Issue Date)

2003-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001445>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001445>



## 調査報告

## きつね・病・死のしらせ

— 兵庫県三田市における怪異譚を中心として —

久下 正史

## 【要旨】

兵庫県三田市域を中心とした、きつね・病の見立て・死のしらせ等の報告六件と、市内で発刊された書籍に収録されている怪異譚五例の報告である。伝聞のみならず、実際にきつねに化かされた人物の経験もあり、民俗社会におけるこれらの怪異に対する意識をすることのできる事例として貴重なものである。

## 【キーワード】

怪異譚 (mysterious tales) ・ きつね (Kitsune) ・ 病 (Yamai) ・ 死のしらせ (Shosirase)

## はじめに

兵庫県三田市は兵庫県中部に位置し、旧摂津国有馬郡と川辺郡の一部を市域としている。近年は住宅地の開発により全国一の人口増加率を示したことによって知られるが、一部の新興住宅地をのぞいて市域のほとんどは稲作を中心

とした農村である。

市域において調査を行う内、きつねや病等に関していくつかの話を聞くことができた。調査の合間に断片的に聞いたものがほとんどであるが、伝聞ではなく、実際にきつねに化かされた人物の話もあり興味深い資料と思われる。今回いくつか分量も整ったので報告することとした。

なお、報告に関しては内容の性格上、地名・人名等を伏せた部分があることをあらかじめ了解されたい。

きつねに化かされることは、「化かされる」・「つままれ」・「だまされる」などと市域では言う。それらの用法は話者の用法によった。

## きつねに化かされた話 三田市下槻瀬

羽束川をはさんで家の真向かいに親戚ではないがIという同姓の家がある。終戦の前、その家の三つ程年上の人が戦死して、遺骨が帰ってくると言うことで、遺骨を迎えに村で木器こうきの停留所まで行つた。その場には在郷軍人会で父が出ているし、母も婦人会で出ているので、自分はIさんの家まで送らなくてもよいだろうと思つて遺骨を送らず自転車で先に自分の家に戻っていた。

しかし、大分経つても両親とも戻つてこない。

「親戚でもないのになんでこんな遅いんやろ。」

と思つて、家の裏の道を見に行つた。羽束川の板橋の手前からIさんの家を見みると、その家の座敷に電気が、障子の棧まで見えるほどにあかあかと点いていた。そして、おっさん①があげているお経の声と鉦の音も聞こえてきた。これを見て、

「親戚でもないのにこんな時間までおる訳がない。もうすぐ帰ってくるやろう。」

と思つて橋の所から引き返した。

家に帰つてはみたものの、やはり一向に家の者が帰つてこない。

「こんなことでは飯も食えへんやないか。」

と思つていたら、大分してからやっと両親が帰ってきた。「何をしとつたんや、橋のとこまで様子まで見ていったんやど。」

と言つたら、両親は、

「Iさんの家へ着くなり帰つてきたで。」

と答えた。

「それはおかしい、自分はIさんの家に電気が点いとるのも見たし、おっさんがあげとつてん② お経の声と鉦の音も聞いたんや。」

と言つたのだが、両親は、

「そんなことはない、自分らはすぐに帰つてきた。」

と言う。

「おかしい、どない言うことや。」

と思つて、明くる日、羽束川の板橋の所まで行つて見ると、Iさんの家の母屋は、納屋にかくれていて橋の所からは見えない。板橋の所から見える納屋には窓もなく、板橋の所から障子が見えたりするような造りの家ではなかった。また、その家は橋から遠く離れていて、障子の棧が見えたり、お経の声が聞こえてきたりするような距離にある家ではなかった。

そこではたと気づいたのだが、その板橋の両側は竹藪になつていて、陰気なところで、きつねに化かされると良く

言われていた場所であつたのだ。

「こらきつねに化かされたんやな！」

と思った。それまではきつねに化かされるとは聞いてはいなくても半信半疑でいたが、

「なるほど。きつねに化かされるとはこう言うことなんや。」  
 と思つて、おかしいことではあるが、きつねに化かされる  
 と言うことはあるものだと思つた。

きつねに化かされると、ありえへんくらいにはつきりと  
 物が見えたりすると言う。障子の棧がはつきり見えたと言  
 うのもまさにそれに当たるであらう。

たしかに、きつねに化かされた話は昔から聞いていた。

大坂峠を歩いていたら、法事のごつそのアブラゲを取ら  
 れた、とか、婚礼に行つたけれども、その日の晩に帰つて  
 こないで、明くる日の朝にどろどろになつて帰つてきて、  
 ええ道があつたさかいこつちやと思つて行つたら溝にはまっ  
 とつた、などというような話である。そう言うことはおか  
 しいことだが、

「いっぺん化かされてみるとそう言うこともほんまにある  
 もんなんや。」

と思ふ。

この辺りには、確かにきつねがたくさん住んでいる。土  
 葬にしていた時分は、土をかぶせているだけではきつねが

棺桶が見えるくらいにまで土を掘り返してしまふので、穴  
 を石で塞いだこともあつた。羽束川の板橋の所の藪と、上  
 のお稲荷さんにはよくきつねが住んでいて、現在でも夜に  
 なつたら行き来をしている鳴き声が聞こえる。「藪と稲荷  
 についてるきつね」だと言っている。

(下槻瀬 大正十五年生 男性)

(1) 僧侶。

(2) 敬語。あげていらつしやる。

きつねにつままれた話 三田市小柿

きつねにつままれると言うのは昔はあつた。

もう亡くなつた人だが、今生きていたら九十五くらいに  
 なる人である。その人が小さい頃の話だから大正初め頃の  
 ことになるだろう。ニシトラのKさんのだんなのお兄  
 さんにあたる人で、自分たちはチユンメサン、チユンメサ  
 ンとよく呼んでいた。名前はKさんと言う人である。

そのチユンメサンが子供の時に、夏祭に行つて、その晩  
 に行方が知れなくなつた。

「こらえらいこつちや。」

と言う事になつて祭どころではなくなつて、村中総出で探

すことになった。探して歩いていたら、チュンメサンはとも子供が行くような所ではない山の中で発見された。みんな、

「きつねにつままれたんやろう。」

と言いつつあった。

この話は非常に有名な話で、小柿の人ならみんな知っているだろう。

うちの家のおばあさんから聞いた話では、「さらのはきもんを昼からおろしたらあかん。」と言うけれども、チュンメサンは祭やと言うことで、嬉しがって昼から履き物をおろして祭に行った。だからきつねにつままれたのであると言うことである。

きつねが物を山に持つていくと言うことは今も良くあることである。日のミツチャンも免許証がない、免許証がない、と言っていたらその免許証が山の中で見つかった、と言うことがあった。また、うちの家も玄関からよく靴がなくなったりするが、それらはきつねが山に持つていつているのである。

きつねにはつままれたりするが、たぬきは人をつまんだりはしない。よくたぬきにつままれる、と言うが、あれはテレビの話で、そう言うことはこの辺ではない。

(小柿 昭和二年生 女性)

(1) 屋号。

### きつねに憑かれた話

三田市の隣、篠山市の話である。

篠山市のHと言う村のTさんの娘さんがきつねに憑かれたことがある。

ある日、急に娘さんがいなくなった。家の者がどこを探しても姿が見えず、

「おらへん。おらへん。」

と言うことで、

「これはきつねに憑かれたんちがうか。」

と言う事になった。そこで、イズモサンという拝み屋さんに頼んで拝んでもらった。そうすると、イズモサンは、

「船坂の木のひっかけといた。」

と言った。そこで、家のものがそちらの方に行ってみたら、いなくなった娘さんがぼろぼろになって出てきた。

自分が娘時分に有名になった話である。私らでも知っている。そんなに古い話ではないので、Hの村に行つて聞いてみたらすぐに分かるだろう。

(岩倉 昭和初年生 女性)

(1) 地名。兵庫県西宮市山口町。

## 死のしらせ

昔は病院が近くになかったし、往診してもらうにも往診料が高くつくのでなかなか医者呼べなかった。だから、病氣になったらこの辺りでは見比のF家のおばあさんで「おゆきさん」という人が押んでくれるので、その人に頼みに行っていた。子供が小さい時分は、「子供が熱出した。」などと言ったら行っていたものである。おゆきさんの所に行ったら押んでくれてちよいちよいとした薬をくれた。

私の嫁入り先のおばあさん(姑)もおゆきさんによく見てもらっていた。おばあさんは長いこと病気で寝ていたのだが、ある晩に、

「具合がわるいさかい見てもうてきてくれ。」

とおばあさんが言うので、私がおゆきさんの所に見てもらいに行った。行く途中、見比の公会堂(1)の前で、金縛りというやつになった。身の毛がよだつようになってさぶいぼ(2)ができて前に進めなくなった。進むに進めず、

「これは、押んでもうても仕方ないということやろう。」

と思つて家に帰ったら、すぐしておばあさんがなくなった。

「こういうことはあるもんやなあ。」

と思つた。

Sのふみさんが死んだ時もそうだった。

「ふみさんあかん。」

と思つたら確かにそうなつていた。

(小柿 昭和七年生 女性)

(1) 慈徳寺と言う廃寺を引き継ぎ、不動明王を祀っている堂でもある。公会堂の脇には近世の巡礼供養碑などの一群がある。

(2) 鳥肌が立って。

## 火の玉 小柿

火の玉と言うのはいやらしい(1)虫の大きなかたまりが火を出すのである。雨が降ったらその虫のかたまりが燃えるのである。いっぺん墓でその虫が地面に落ちたのを見たが、いやらしい虫だった。

(小柿 昭和二年生 女性)

(1) 気味の悪い。

## 病の見立て 広野

昔、まだレントゲンが市内の病院にはない頃の話である。家内の鼻の横が急にぶーっと腫れだして、痛がるので市内のS病院に見てもらいに行った。そうすると、S病院の先生は、

「多分、歯がおかしい所に生えよるんやろうけど、いっぺん、レントゲンのある県立病院まで行って見てもーてこい。」

と言う。そこで、紹介状をもらって神戸の県立病院まで行った。そうして、県立病院でレントゲンを撮ってもらったら、県立病院の先生にも、

「これは歯がはえよるんや。手術せなあかん。」

といわれた。そして、撮ってもらったレントゲンを持って、

再び市内のS病院に行って先生に見てもらっても、

「やっぱり歯がはえよるんや。」

と言うことであつた。

その時はちょうど麦刈りの頃で、まだ作業が機械化される前だから人手がいる。だから入院して手術することができない。麦刈りが終わっても、すぐ田植えでまた人手が要るので入院できない。

「入院して手術するのは田植えの後になるなあ。」

と言ったら、

「まあ仕方ない。」

と言うことになって、田植えの後に神戸の県立病院に入院して手術することになった。

それでも入院したり手術したりと言うのは大変なことなので、手術の前に、いつも見てもらう吉川(1)の「オダイツサン(お大師さん)」の所に相談に行った。そうすると、部屋に入るなり、こちらはまだ何も言わないのに、

「こらあかん。手術なんかしたらあかん。これは歯がはえよるんやないで。手術なんかしたら顔に傷がつくだけや。」と言われた。そこで、オダイツサンに祈禱をしてもらった。そうすると見事に腫れが治ってしまった。

「何も言うてへんのに見ただけでそんだけ分かるとはすこいもんや。」

と感心した。

そして、話者の老人はこう言った。

なんば偉い先生にレントゲンまで撮ってもらって見てもらうて、

「こやや。」

と言われても、見ただけでそれよりもっとちゃんと良う分かる人はおるもんです。そら、吉川のオダイツサンはたいしたもんです。

(広野 大正三年生 男性)

(1) 地名。兵庫県三木市。

## 三田市域の拝み屋さん・行者

三田市域においては病の祈祷などを行っていた拝み屋さんがかつては何人かいたようである。病院がいまだ整備されていなかった昭和三十年代から四十年代までは子供が熱が出た、とか腹痛になった、とかと言えは祈祷をしてもらい、人によつては薬も処方してくれたようである。死の予兆の話でも分かるように、子供のみならず、病で寝たきりになった老人などに対しても祈祷を行っていたようである。

三田市の高平地区では、三人の拝み屋さんの存在を知ることが出来る。下槻瀬の男性に聞くと、あまり良い顔をしていないで、

下槻瀬の宮さん(天柏神社)の向こうにおばあさんが一人で住んでいた。この村の人ではなくて、よそから移ってきた人である。七十からの人で「拝み屋さん」と呼んでいた。ここの人が来ていたのは知らないが、よそからちよくちよく来ていた。きつねが憑いたりし

にも拝んでくれて、拝んだら「きつねがどく」と言っていた。

と言った話を聞かせてくれたが、女性に聞くとごく当然のように話してくれる場合が多い。また、その拝み屋さんも「見比のF家のおばあさん」であつたり、木器で聞いたところでは、

昔、自分の実家のおばあさんが拝み屋さんをしていて、その時に祀っていた神さんがあつて、何の神さんか知らないが今も祀っている。

と言うように、特別な家柄や特定の人物がなるというようなものではなかったようである。ごく普通の家の女性が何かの契機に拝み屋さんになつていたようである。

他方、男性でも、市内においては生業の傍ら行者(修験者)の修行を行い、その験力によつて病等の祈祷を行う者が少なくともあった。高平地区では小柿のF家のオモヤ(本家)の当主が行者として病の祈祷をよく行っていたと言い、旧有馬郡内では現在では現役を退いてはいるが、病などに對する祈祷を行っていた行者がいる。その行者は、老年になり足が不自由になつたのであるが、

昔は病院ゆうてもなかなかいけへんださかい皆行者やらに病氣をみてもうたもんや。今はほとんどおらへんけど、うちにもよう病氣みてくれゆうて来る人が

おった。

うちのおじいさんもおやじも祈祷をようやとつて、わしもやつてみたい思たから祈祷を勉強してやった。祈祷しようと思たら修行して験を積まないかん。せやさかいわしもよう方々へ修行に行たもんや。瀧修行やらもようした。Oさん（先輩格の行者の名）やは「祈祷したら悪いもんを引き受けることになる。」言うてそういうことするんを嫌うてやけど、わしはしてみたかったさかいいろいろ祈祷した。せやけど、今、足悪うして不自由になつたんは、祈祷して人の悪いもんをかぶつたさかいかもしれん。

と言っている。

行者になる者もその契機として、大病をして行者の修行をするようになったと言ったものや、家族が行者をしていだからと言うものなど個人的な経験や、親がしていたといった理由によって行者になり、祈祷を行うのも個人的な理由から行うものが多かったようである。また、人々も日常的にそれらの人々の力を借りていたようである。

### 近年の文献資料から

以上、調査において採録された怪異譚であるが、市内で

発行された既存の文献にもいくつか類話が採録されている。近年に発刊されたものではあるが、一般には入手困難であり、報告の補足ともなるので紹介したい。また、いずれも地元の老人によって書かれたものであり、彼らの怪異に対する意識も分かる興味深い資料でもある。

西村忠敦『北摂羽束の郷土史誌』（六甲タイムス、一九九五）所収の話である。著者は大正十四年三田市小柿生。

### 子供の道草

昭和初期までの子供たちには、次のようなことがよく話題になりました。

あそこの道の角や、真昼でも大木の陰になる場所は、夜になると幽霊が出るとか正念王が出るとかいう、怖い場所が幾つもありました。

大人達には無縁の気にもとめない話ですが、子供の世界では流布され信じられていました。

夕方遅くにそこを通ると狐にだまされるとかいうわけで、少年少女たちにとっては気になる不安な、奇妙な妖気が漂う場所でした。

この話の起源は不明で、上級生から次々に下級生に伝承されてきたのでしょう。

夕方暗くなるまで友達と遊び回っていて、帰って来ない子供を心配した親が子供たちに対する作り話で警鐘の句にしたのか。それとも子供たちの自作演出なのかわかりませんが、いずれにしても愉快な小話といえそうです。

それらの場所は通行する道路で、

橋のたもとの椿の木付近

峠山の回り角付近

十王ヶ鼻の剣先付近

下の郷の寺付近

中筋通りの藪付近

上の郷の十三仏付近

.....

.....

### 幽霊を見た

大正末期のことです。お寺の老母堂が隣村寺院を訪問されての帰途、時刻は真つ暗やみの午後九時頃、一人で提灯の明かりを頼りに夜のあぜ道をとぼとぼ歩い

てきて、別れ道の杉の大木の先端を見ると、金の入れた歯をして着物を着た美しい婦人が「ニタツ」と笑いがら幽霊となって現れました。

びっくり仰天したご母堂は、急ぎ足で土橋を渡り、ある郷のお婆さんたちが集まっている家に飛び込んで、怖い幽霊の話を見んなにされました。ところが、何とその時刻に、近くで病臥中のご婦人が亡くなられたことが分かり、その場に集まっていたみんなは、不思議な因縁にただ驚くばかりでした。

このことがもとで、ご母堂は心労と肩こりが起きて、二、三日病床につかれたとのことです。

亡くなられたご婦人は、主人と日頃から夫婦仲が悪く口論が絶えなかったので、老母堂がいつも心にとめて、けんかの仲裁をされていたのです。

ちなみに幽霊は、この世に生まれ心を成就できない人や、執念が深かった人の霊が成仏できないで、魂がさまよえるときに出るとも世間で説法されていますが、一概にそうだと信じ難いところがあります。

しかし、これを単に迷信とか、たわむれと締めつけるほどには、人の生死にかかわることを論じるのは、難しいことなのです。

次は、三田市社会福祉協議会・三田市老人クラブ連合会『文化伝承活動』第三集所収の鈴鹿老人クラブ「安楽寺縁起・幽霊・憑きもの」に収録されているものである。

この冊子は各村々老人クラブが任意に題材を選んで各編を編集し、それを総合したものである。鈴鹿老人クラブの章の内第二節「幽霊・憑きもの」に収録されている三話を引用する。いずれも鈴鹿老人クラブの会員によって書かれたものである。

まず第一話であるが、昭和十七年、筆者が二十歳の時の祖母の臨終に関わる人魂の経験を感じ動に記したものである。筆者は未詳。

### (1) 鎌を持った人に追われた人魂

世の中の人が人魂と言え、幼いころに見たことがあるとか、昔の人から聞いたことがあるとか、真剣に話し合う話題の一つであると思います。

人々の話を総合すると、人魂は燐の固まりで、小さなボールのような形で空中にふわりふわりと浮遊して、やがてどこかへ消えてしまうそうである。人それぞれに一つの魂ありと言うが、自分でその魂を見たことがある人はいないのではないかと思う。しかし、人

間がこの世を最後とする時、その人から魂が抜けて死に至ると伝説ではいっております。

それで少しの間、私の記憶の中から一部を紹介してみたいと思います。

それは昭和十七年七月のことです。今から五十八年前で、私が二十歳のときでありました。祖母は慶応三年生まれ、その当時七十一歳でしたが、持病のリウマチが悪化し、この世との別れもきょうかあすかと、家族の者が毎日毎日夜となく昼となく付き添って看病しておりました。

七月一日夜十一時頃と思いますが、今まで夢路をたどっていた祖母が突然大きなため息をついて目をさまし、がたがた震えだし、前身汗びっしょりになりました。どうしたのかと、家族の者みんな顔をのぞき込み、タオルで顔をふくやら水を飲ますやらして大騒ぎとなりました。

その時、祖母は小さな声で、アアこわかった。夢であつてよかつたと言ひ、そのおそろしかつたことを、次のように話してくれました。

祖母は田の水が気になつて仕方がないので、自分の田を見に行つたそうである。(それは夢の中で)そのとき、鎌を持った男の人にどんだん追いかかれ、そ

れはそれは一生懸命に逃げたそうである。自分の家まで帰って来ると、その鍬を持った人はすぐごと帰って行った、とそこまで話を続けた時、表で戸をたたく音がするので、私が出てみると、それは隣りのおじさん、庄平さんでした。

「光ちゃん不思議なことがあるのですなア。おれが昼に田に水がはいらないので、先ほど（午後十一時）自分の田に水を入れようと、鍬で堰を作っていると、青い火の固まりが空中にふわりふわり浮いているではないか、おれは腰を抜かしてしまい、それから起き上がった鍬でたたき落としてやろうと思ひ、振り上げたがなかなかはたき落とすことができず、あちこちに飛び回るので、何の手ごたえもなく、とうとう追いつけている間に、お宅の家まで来てしまい、その辺で、消えてなくなった。」

本当に不思議なことだ。淋しいやら、おそろしいやらで、それで飛んで来たのだ、」

と、息も絶え絶えに話を続けた。

私は、病む祖母と隣りの庄平さんの双方の話を聞き、しばらく目をつむつて考えていたが、それは隣りの庄平さんが祖母の魂、すなわち人魂が田の辺で浮遊しているのを、鍬で追いかけていたのだ、と知ることがで

きました。

その話を聞いていた父（当時四十五歳）は涙を流して、いく度も頭を下げた。その父の胸には、先祖より預った田畑を近日中に人の手に渡ることになっていたので。病む祖母は言葉では何も言えず、足も立たず、ただ魂だけがなつかしい田畑の上をさまよっていたのではなからうか、と父の脳裏をかすめていたのでしょう。

明くる日、父はこう言いました。人魂が落ちた所には、かならず虫の幼虫が一かたまりとなっている、と昔の人が言っていた。一度、隣りの庄平さんが見た人魂の落ちた場所へ行こうと言って、一家の者があちこち捜している時、妹がこんな所に虫が一ぱい、と呼びました。皆走り寄ったら、それはそれは、何百匹という幼虫が一かたまりとなって、うようよしている。家族の者が目を皿にして、これが人魂の落ちた所か、不思議不思議と見つめているうちに、その幼虫はどうして地下にもぐったのか、数分のうちに見えなくなってしまう。人魂の虫は、人に見られるとすぐ消えてしまうと昔から言伝えがある、と父は話を続けました。

それから一ヶ月後八月十四日、祖母は帰らぬ人とな

りました。さて、こうして記憶をたどって書いていると感動に胸おどり、半世紀前のできごとが、まざまざとよみがえり、人魂のことを真実と思いますが、科学的現実的にと理論をのべる人々もあると思いますが、尊い人間の生命、そしてその人の魂などなど、仏教的にどう解するか、私の残る人生の課題であると思っています。

次も筆者未詳である。筆者三歳、大正七年の時の話で、主には隣家の老人から何度もきかされた話である。

## (2) 幽霊を背負った話

私は現在七十八歳ですが、三歳の秋のことでした(大正七年)。何か隣りの家で大声で叫び泣きかなしむのを、家の外で遊んでいた私は、何ごとだろうと思いい、走って情況を見に行きました。

その家の人の話しや近所の人々の話の内容から、子ども心に何かをつかむことができました。それは次のようなことがらで、実に不思議な事実です。

その家に九歳になる勝三という男の子がおりました。私は父と共によくその家へ風呂に入れてもらいに

行きました。勝三さんはやせ細って、いつも寢床で顔だけをこちらに向けて寝ておりました。聞けば六か月ほど前から、胃腸をこわして下痢ばかりで、食欲もなく、見るからにお気毒な有様でした。学校もほとんど休み、医者がよく診察に来ておりました。

そこで、私の見た大騒ぎのあった日のことです。

家のおじいさんは、お風呂の薪を取りに山へ行ききました。一生懸命薪をこしらえていると、下の方から大きな声で、おじいさん、おじいさん、早く帰らないと日が暮れるで……と叫ぶ声でしたのです。おじいさんは声のする方へ駆け下りると、そこに今まで家に寝ていたはずの、勝三さんが紺がすりの着物を着て、草履をはいて立っているではないか……おじいさんはびっくりして、おまえ、こんなところまで来たのか、あぶないあぶないと言いながら頭をなでて、さア、おじいさんが背負って帰ってやろうと、その子を背中におんぶして山を下りて来ました。そうすると、現在この村のお墓のある、すこし下まで来ると、その家のおばあさんの「おやゑ」さんという方が、おじいさんおじいさん、早く帰って……勝三が今、死んだ、早く早く、息も絶え絶えに叫びながら山を上がって来た。

おじいさんは「何を言っているのか、勝三は今、お

れが背負っているのではないか……馬鹿なことというな……」とうしろを振り返ってみると、今まで背中にいたはずの勝三がおらない。手は後ろにまわしたままです。

「アレツ」と叫びながら、「夢みたいだ……不思議なことだ、ほんとに不思議だ」と、おじいさんは気が抜けてしまつて、そこにへたへたとすわり込んでしまひました。

おやゑさんは、勝三が幽霊となつて、死んでからすぐに貴男のそばに飛んで来たのでしよう。よくかわいがつた貴男ですから、忘れなかつたのでしよう。サア、気を取りなおして家に帰ろう、と二人は悲しみながら家に着きました。

そのとき、大ぜいの人々が早くもお悔やみに訪れていました。

なんと、不思議なこともあるものだと、その当時の事を思い出して記してみました。

その後、おじいさんは生涯、何度も何度も勝三さんを背中におんぶした様子を、私たちに話してくれました。

これも筆者未詳である。明治三十五年の話で、父親から

の伝聞である。

### (3) 狐、狸は人をだますか、だまされた話

いま、私が父から聞いた話を語ろうと思うが、なにゆえか、抵抗を感じる。いまの世の人にとつては、そんな風景があつたのだろうかと考えられるからです。

高平の奥地の末吉村から柏原まで、約四KM、いまはゴルフ場となり、柏原にもゴルフ場ができて、一望幾KM、みはるかす緑地と化してしまつたが、明治三十五年、いまから百年も昔のこと、父が二十歳の頃であつたらしい。竹籠を作つて行商に出るのが日課であつた。山間僻地を通つて、人の行けない所へ行商に行けば、売れゆきもよいので、その日は五十センチ幅の細い山道を、うつそうつたる杉の林の中を柏原まで行つたが、どうしてもその日は売れず、夕やみ迫る峠を越して帰路に着いた。そのとき、どうしたことか、着物のすそが急に重くなり、足元がもつれて歩けなくなつてしまつた。あたりは深閑として、淋しさがひとしお身に迫る。籠をおろして、しばらくしてまた歩こうとするけれども、どうしても歩けない。あまりの淋しさに、おつ母ァーと叫んだ声は四方にこだまして、そ

の声だけが遠く尾を引く。

泣けてきて仕方ない。今度は道なき所に入ってしまった。いばらの一ぱいある山の中に踏み込んでいたのである。もうどうすることもできない。これは、確かに狐狸のしわざではないかと思ひ出した。

父は持っていた握り飯を四辺にバラまいた。自分には見えないが、カサカサという音がして、またもとの静けさにかえった。狐などは火というのがきらいということを思ひ出し、持っていたマッチをすって灯をつけた。それからスックと立ちあがってみた。着物が軽い。足を一歩出したら歩ける。アア歩ける。驚きと喜びで一ぱいである。山道が杉の木の下に白く、続いてみえる。それから何なく山を下りて家路にたどりついた。

父はここまで話を続け、最後に、狐たちもよほど腹がすいていたのであろう。握り飯がほしさに、まつわりついたのではないか、でもひどい目にあった。それからあの山道を通るときは弁当を持たずに行き来したと言っていた。

今から考えてみると、とても珍しい話だが……百年も前のことだから、あの奥山には、たくさん狐狸がいて、こんなこともあっただろうと思われてならない。

#### おわりに

以上、兵庫県三田市を中心に、きつね・死のしらせ・病の見立て等に関する話を六事例報告した。また、近年の文献資料に見られる地元の老人による報告を五例紹介した。何れの話も話者にとつては事実として認識されている話である。特に、筆者の報告した一事例と、『文化伝承活動』第三集に収録されている事例は実際に経験した人物の報告として興味深い事例であろう。

また、病の見立てに関しては、話者は近代医学の診断と民間宗教者の呪術的な診断を等価のものとして判断し、結果として民間の宗教者の診断をよりすぐれたものとして判断し、呪術的な治療を選択している。民俗社会における医学観として常に認識しておくべき事実であると思われる。

(くげ まさふみ、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程)